

Performing Arts Review (22)

ウラジーミル・ナボコフ「ロリータ」(1955)

朝、靴下をはくとただのロー、スラックス姿ならローラ、学校ではドリー、二人きりのときはいつもロリータ。そして五年後オハイオに…

平成23年9月30日 中野希也

ニューヨークの紀伊国屋がまだロックフェラーセンターにあった頃、この文庫本を買った。この小説が20世紀の英語で書かれた文学作品ベスト100の2位に選ばれていることを知り、一度真剣に向かい合おうと思ったからである。

過去同様の経験が一つあった。「ドンキホーテ」というと“スペインの老騎士が槍を構えて風車に向かう”プロットしか知らず、これが「世界十大小説」の一つと知ったのは5年前で慌てて文庫本全6冊を読破し、その内容に深い感銘を受けた。

冒頭の有名なくだりを見よう。

ロリータ、我が命の光*、我が罪、我が魂。
ロ・リー・タ。舌の先が口蓋を三步下がって、
三步目にそっと歯を叩く。ロ。リー。タ。
朝、4フィート10インチ**の背丈で靴下を
片方だけはくと***ロー、ただのロー。
スラックス姿ならローラ。学校ではドリー。
書名欄の点線上だとドロレス。
しかし私の腕のなかではいつもロリータだった。



訳注を見ると

* 英語では Lolita, light of my life と“L”の韻を踏んでいる。

** ナボコフは、12歳から14歳までの女子の身長と体重の当時の統計を創作カードに残している。それによると12,13,14歳の平均身長は147,152,157センチ、体重は39,44,49キロである。これに対してロリータは144,150,152センチ、体重は35,39,41キロと身長が平均よりやや低く、体重はかなり軽く痩せ気味であることがわかる。虚構のキャラクターを作り出すのに、こうした科学的アプローチを取るのがナボコフの独特なところだ。

*** もう片方の靴下はどこへ行ったのか。本文中から見つけ出してほしい。

新潮文庫「ロリータ」は若島正京都大学大学院教授がナボコフ自身のロシア語翻版に基づき2005年に翻訳した。手に取ると600頁以上の分厚い本である。本文が552頁、訳注が50頁もある。

主人公ハンバートはフランス生れ、39歳の英文学者でこのような理論を持っている。

「九歳から十四歳までの範囲で、その二倍も何倍も年上の魅せられた旅人に対してのみ、人間ではなくニンフの(すなわち悪魔の)本性を現すような乙女が発生する。そしてこの選ばれた生物を、『ニンフェット』と呼ぶことを私は提案したい。」

夏をニューイングランドで過ごすため下宿をさがしているときヘイズ夫人宅を訪ねたが、気に入らず去ろうとしたとき、

突然緑の景色がどっと燃え上がった。“裏庭ですの”と前に行く婦人が声をあげ、そのとき、なんの前ぶれもなく、青い海の波が私の心臓の下からわき起こり、日溜りに置かれたマットから、半ば裸の恰好で、膝をつき、こちらをふり向いて、サングラスごしに私を眺めていたのだ。

“あれがわたしのロー”

“ええ。すばらしい、すばらしい、実にすばらしい！”

昼食の後で、私は低い椅子にもたれて本でも読もうとしていた。すると突然、二本のすばしっこい手が私の目を隠した。私が朝に取った作戦を、あたかもバレエのシークエンスで再現するみたいに、彼女が背後から忍び寄ってきたのだった。彼女の指は太陽を消し去ろうとして深紅の光になり、私をもたれた姿勢を変えることなく腕を横や後ろに伸ばすと、彼女はしゃっくりしながら笑い転げ、あっちへこっちへとよろめいた。私の手が彼女のくすくす笑う機敏な脚をかすめ、本がまるで櫓のように膝から滑り落ちたとき、ヘイズ夫人がぶらりとやってきて、寛大にもこう言った。“ご研究で考え事をなさっているのに、あの子が邪魔したら、思いっきり叩いてやればいいんですよ。”

ヘイズ夫人は娘を2ヶ月間のサマーキャンプに参加させることにした。たしかに私はロリータに永遠の恋をした。しかし、彼女が永遠にロリータでいるわけではないこともわかっていた。彼女は1月1日に13歳になる。2年もたてば、ニンフェットではなくなり、『若い娘』になって、それから、『女子大生』になるのだ—想像するだけで恐ろしい。『永遠』と言う言葉が指すものは、我が情熱、我が血の中に映し出される永遠のロリータしかない…眠れぬ夏の2ヶ月を、どうして彼女に会わずに過ごせようか？残りのニンフェット期間は2年しかないのに、そのうちの丸2ヶ月なのだ！

夫人が娘とキャンプ地に出発したあと直ぐに女中が切手の貼られていない奇妙にきれいに見える手紙を持ってきた。ヘイズ夫人からの求婚の手紙だった。

「告白します。私はあなたを愛しています…わたしは初めて会ったそのときから、あなたを愛してきました。わたしは情熱的でさびしがりの女で、あなたは最愛の男性です。」私の最初の反応は、“嫌悪と後退”だった。二番目の反応は“ドストエフスキ風の薄笑いが、遠くの恐ろしい太陽”のように浮かび上がってくるのを感じた。そうしてこの町に来て一ヶ月にもならないとき、結婚式を挙げた。

ところが夫人は4週間後に交通事故で亡くなった。私はキャンプの団長に、ドリーの母親が入院したと言って、病状は重く、そのことはあの子に教えないように、明日の午後に私と一緒にそちらを發つ手筈を整えてほしいと告げた。

彼女が重いスーツケースを引きずり、あちこちにぶっつけながらやってきた。私はあたたかくて鶯色の髪に手を置き、スーツケースをつかんだ。彼女は全身が薔薇と蜂蜜で、小さな赤い林檎の模様が付いたとびきり華やかなギンガムを着て、腕と脚は濃い金褐色を帯び、そこには搔き傷が凝固したルビーの小さな点線みたいについていた。

「お母さんはどう？」と彼女は事務的に尋ねた。

「医者話では何の病気かわからないそうさ、しばらくはあちこちに泊まることになるだろうな」と私は言った。

「おまえがいなくてとっても寂しかったんだ、ロー」

「あたしはべつに。あなたはあたしのことなんかかまってくれなくなったんだし。」

「どうして私がかまわなくなったって思うんだ、ロー？」

「だった、まだキスしてくれてないんだもん」

内心では死にそうで、内心では悶えながら、車が大きく跳ねて草むらによるよろ突っ込んでいった。

「小銭ちょうだいよ。お母さんのいる病院に電話をかけたいから。番号何番？」

「電話しちゃいけない」

「お母さんに電話かけたいのに、どうしていけないの？」

「実をいうとね、おまえのお母さんは亡くなったんだ」

そのときから、全米にまたがる大旅行が始まった。一年に及ぶ旅行のあいだ、毎朝私は何か期待を持たせ、彼女が楽しみにして、就寝時間まで彼女を保たせておけるような、時空間における特別な一点をでっちあげなくてはならなかった。そうしないと、血や肉となる目的を失って、彼女の日々の骨格がたるみ崩れ落ちてしまうのだ。視界にある目標物はなんでもよかった一ヴァージニアの灯台、喫茶店に改造されているアーカンソーの洞窟、オクラホマのどこかにある銃とバイオリンのコレクション、ルイジアナにあるルルドの洞窟の復元、ロッキー山脈のリゾート地にある博物館に飾られている金鉱発掘時代の古ぼけた写真とか、何でもいいが、動かない星みたいに、とにかく私たちの行く手にちゃんとあることが大切で、そこにたどりついたらすぐにローがうんざりしたふりをして仕方がなかった。

うるさ型ではないローは便所の表示をおもしろがった一男子 - 女子、ジョン - ジェイン、ジャック - ジル、牡鹿 - 牝鹿というやつまであった。

全米の地理を稼働させることで、私は何時間もぶっ通しで全力を傾け、「旅行してまわる」という印象、つまりどこかたしかな目的地を目指し、物珍しい楽しみを目指して車を走らせているのだという印象を彼女に植え付けようとした。今私たちの前に光り輝いている、狂ったキルト刺繍のような 48 州を横断する、こんなになめらかで快適な道路はこれまで見たことがなかった。

ニューイングランドから始まり南に行き東へ西へと蛇行しロッキー山脈を越え太平洋に出ると北に進路を取りカナダ国境にたどりつき最後に東部に帰った。知人の紹介でフランス語教師の職を得て彼女を女子校に入れた。

一年後、

「ねえ、決めたことがあるの。あたし、学校をやめたい。あの学校、嫌い。劇も嫌い。ほんとよ！もう戻らないわ。他のを探す。すぐに出発して。また長いたびに出て。でも今度は、あたしが行きたいところに行かせてよ、いいでしょう？」

私はうなずいた。我がロリータ。

「あたし選べる？それでいい？」

「わかった。いいとも。」

さらば、アパラチアよ！そこを離れて、私たちはオハイオと、「I」で始まる三つの州

(Indiana, Illinois, Iowa)、それにネブラスカを越えた一ああ、西部の息吹！私たちはのんびり旅をして、ロッキー山脈分水嶺のウェイスに着くまで一週間以上もかかり、さらにはある西部の州の宝石とも言うべきエルフィンストーンに到着するのに三週間はかかった。

数日後、ローは、キャビンに入ると、曲げた腕に顔をうずめ、気分が悪いと言った。肌は燃えるように熱い！体温を口のところで測ってやり、幸いにもメモに書き留めてあった計算式を調べて、意味不明な華氏を子供の頃から慣れ親しんだ摂氏にやっとのことで直してみると、熱は 40.4 度で、これならわかる。私は彼女を膝掛けでくるみ、病院に運んだ。

私はこの二年間で初めて、わがロリータと離ればなれになったのだという単純な事実をうまく呑み込めない自分に気づいた。そのとき突然閃いたのは、彼女の病気はある主題の展開ではないかということだ。つまり、秘密の工作人員というか、秘密の恋人というか、悪戯者というか、妄想というか、何でもかまわれないが、とにかくそいつが病院のあたりをうろつきまわっている姿を私は想像した。

カルメンと私は言った（ときどき彼女をそう呼んでいたのだ）。“お前が起きられるようになったら、すぐにこの靴きあがってひりひりする喉みたいな町から出て行こう”

“ついでに言っとくけど、あたしの服ぜんぶ持ってきて”と膝を抱えてページをめくりながらジブシー娘が言った。“本当に”と私は続けた。“こんなところに泊まっても意味がないからな”“どこに泊まっても意味がないわ”とロリータが言った。

翌日、私が病院に電話すると、事務員が明るい声が電話に出て、ええ、万事順調ですよ、娘さんは昨日退院されました、かねてからの手筈どおりにおじいちゃんの牧場に行っている、と連絡しておいてくれとのことでした、と言った。

どこに隠れてるんだ、ドロレス・ヘイズ？ 手がかりになる足どりもなく。

（ぼくは言葉も朦朧として、迷路をさまよう。 デラレナインダヨ、と椋鳥も啼く）

（訳注。ロレンス・スターンの『感傷旅行』（1768）からの引用。語り手はパリを旅行したとき、鳥籠の中で“デラレナインダヨ”と繰り返す椋鳥の姿を見て強い印象を受ける。）

孤独が私を腐食しつつあった。私には人とのまじわりといたわりが必要だったのだ。リタがここに登場してくる。彼女はしゃれたクーペを持っていたのでそれに乗って私たちはカルフォルニアに旅行した。かわいいリタ！

1950年の夏から1952年の夏までの薄暗い2年間のあいだ、私たちは一緒に各地をまわり、彼女はこんなにすてきで、こんなに単純で、こんなにやさしくて、こんなに頭の悪いリタは他にいないと思うほどの女性だった。私が病院送りにならずすんだのも間違いなく彼女のおかげなのである。

突然一通の手紙が、私のアパートに届いた。

“親愛なパパへ

お元気ですか？私は結婚しました。これから赤ちゃんを産むところです。この手紙は書くのがむつかしくて、借金を払ってここから出て行くだけのお金がないので、頭がおかしくなりそうです。・・・家の住所を書かなくて申し訳ありませんが、あなたはまだわたしのことを怒っているかもしれないし、主人には知られたくないんです。ねえパパ、お願いだから小切手を送ってください。300ドルか400ドル、あるいはそれ以下でもなんとかかなります。”

彼女が指定した郵便局はニューヨークから800マイルほど離れた小さな都市だとわかった。珍しい苗字なので家をさがすのに時間は掛からなかった。足音と衣ずれの音がして、ドアが開いた。2インチ背が高くなっている。ピンク縁の眼鏡。新しい、高く盛り上げた髪形に、新しい耳。なんてあっけないんだ！私が3年間も夢想しつづけたこの瞬間、この死が、乾いた木片のようにあっけないものだったとは。

「まあ——」彼女は一瞬間を置いてから、驚愕と歓迎を強調して息を吐き出した。私にはもちろん、彼女は殺せない。つまり愛していたからだ。一目みたときから愛していた、最後にみたときも、そしていつ見るときも、永遠に。

「さあ、お前を連れ去った男の名前を教えろ！」ほんとにいくらきいても無駄なんだから、絶対にしゃべらないし、と彼女は言って、でもそれはそれとして、結局——「ほんとに誰だか知りたいの？じゃあ言うけど、実は—— これまで夢中になったことがあるのはあの人だけ。主人？、主人ってすごくいい人よ、一緒にいてとても幸せだし、でもそれとは別の話で、私はもちろん問題外だったのか？

彼女が私を眺めた目つきは、まるで信じられない事実を一気に把握したようで、このピロードの上着を着て横に座っている、よそよそしくて、エレガントで、すらりとした40歳の虚

弱者が、彼女を慈しんだとは思ってもよらなかったのだ。奇妙な眼鏡をかけている、彼女の色あせた灰色の瞳の中に、私たちの哀れなロマンスが一瞬映し出され、検討され、そしてあっさり捨てられた、まるで退屈なパーティみたいに、まるでとびきり退屈な連中しか来ない雨の日のピクニックみたいに、つまらない勉強科目みたいに、まるで彼女の子供時代にほんの少しこびりついている乾いた泥みたいに。

頭のかたいこと言わないで、と彼女は言った。過去は過去じゃないの。いいお父さんだったと思うわーそれだけは認めたい。

私は全世界にぜひ知ってもらいたいのだ、私がどれほど我がロリータ、このロリータを愛したかを、色あせて卑しめられ、他人の子供でお腹が大きくなってはいても、やはりまだ灰色の瞳をして、まだ煤のように黒い睫毛で、まだ鶯色とアーモンド色の、まだ私のものなのだ。違う暮らしをしようじゃないか、僕のロリータよ、二度と離ればなれにならないところへ行って暮らそう。オハイオ？

「ロリータ、こんなことを言っても無意味かもしれないが、それでも言わないわけにはいかないんだ。人生は短いからな。ここから、おまえがよく知っているあのぼんこつ車まで、20歩か25歩くらいの距離だ。歩いてほんのわずかだろ。その25歩を歩いてくれ。今。今すぐに。そのままの姿で来てほしい。そうすれば私たちはきっといつまでも幸せにくらせるから」

「頭おかしいんじゃないの」

「考え直してくれ、ロリータ。本当に一緒に来ないのか？来る見込みは全くないのか？それだけ教えてくれ」

「ないわ」

彼女と犬が私を見送ってくれた。驚いたことに彼女は子供の頃そしてニンフェットの頃に乘った古い車を見ても、まるで無関心であった。

「最後に一言。おまえは本当に、本当に——まあ、もちろん明日でなくてもいいし、明後日でなくてもいいんだが—その—いつか、いつでもいいから、私と一緒に暮らしてくれないか？もしおまえがその超微細な希望を与えてくれるんだったら、私は新品の神を創造して、絶叫をあげて彼に感謝するよ」

「だめよ」と彼女はほほえみながら言った。「だめ」

「さようならあ！」と、永遠に生き、そしてもう死んでいる、我がアメリカのすてきな恋人は歌うように言った。

やがて日も暮れゆき、私は霧雨の中を走っていて、フロントガラスのワイパーも大車輪で活躍したが、涙だけはどうすることもできなかった。

